

私はこう 考える

「規範意識」
って
何だろう？

《解説》

規範意識に至る過程

内藤俊史

(大学教員)

規範意識とは、さまざまなタイプの規則や規範について、それを守るべきであるという意識や心のあり方を意味する。しかし、「規範意識を育てよう」という場合、子どもたちに期待していることは、ただ単に、子どもたちが規範に沿った行動をとることだけではないだろう。また、仮に規範に従おうとする一般的特性が存在するとして、その特性をただ培うことだけでもないと思われる。私たちは、規範に従う行動や規範を守ろうという意識や判断に至るまでの心の過程自体の成長を期待しているのではないだろうか。このように広い視点から規範意識をとらえてみると、さまざまな心の成長が射程に入ってくる。

規範意識は、子どもたち自身が持つ社会的な世界、つまり社会的なやりとりの広がりと共に経験する新たな場の中で成長をする。本稿では、それらの経験において子どもたちが何を獲得するのかを考える上で重要と思われる二つの点を述べたいと思う。

第一は、規範意識の成長には、知識の獲得や感情などの成長がかかわっていることである。

規範意識が生じる時に、どのような心理的な過程や要因がかかわっているのだろうか。発達心理学者ジェイムス・レストは、道徳性を構成する要素として四つの要素を提案したが、それらの要素は、道徳

内藤俊史（ないとうたかし）

お茶の水女子大学大学院教授。著書：『子ども・社会・文化—道徳的なこころの発達—』（サイエンス社）など。子どもや青年の道徳性についての調査、研究を進めています。

的な規範に従う行動に至るまでの典型的な心理的な過程を示唆している。ここでは、それらの要素について手短かに説明をしたい。

a 道徳的感受性 その場面におけるほかの子どもの心の痛みや喜びを知る能力（感受性や共感）。

〔例〕遊びの仲間に入れない子どもがいることに気づき、その子どもの感情を理解する。

b 道徳的判断 その場面における問題を、自分の持つ道徳的原則やさまざまな知識に照らして判断をする。

〔例〕「友達を悲しませてはいけない」という道徳的原則の下で、自分の仲間に入れるのが正しいと判断する。

c 道徳的動機づけ 正しいと判断された行為を実行する義務感やそうしたいという感情を持つこと（道徳的な規範意識）。問題となつている状況における人間関係や集団に対するかわりの感覚、自尊心などを実行への義務感や動機にかかわる。

d 道徳的行動 すべきとされた行動を実行する過程。自分自身の行動を律するための自己制御の能力や意志、効果的に実行するための行動計画の能力。

これらの要素を見ると、「すべきである」という規範意識に至るためには、認知的な能力や感情などの発達がかかわっていることが改めてわかる。例えば、「誰も人がいなくなる部屋では電気を消す」という自然資源に関する規範意識は、電力を生み出すために多く資源が消費されるという知識（認知）によって高まるだろう（b 道徳的判断の要素）。

しかし、認知的な発達を遂げているにもかかわらず規範を逸脱する行動が、今の子どもたちの問題であるとも言われている。規範意識に至るためのほかの要素について検討がさらに求められる——例えば、c 道徳的動機づけに含まれる集団における関与の感覚等々。

第二は、規範や規則のタイプによって規範意識の

成長のために必要な事柄やそのための経験が異なることである。

これまで道徳的規範を念頭に話を進めてきたが、規範意識の対象は、道徳的な規範や規則に限らず、法律や校則などが含まれる。発達心理学者エリオット・トゥリエルは、規則を三つの規則に分類している。まず、**道徳的規則**は、「理由なく相手を傷つけてはならない」などのように普遍的かつ変えることのできないものとされる。**社会慣習的規則**は、「赤信号で止まる」などのように、社会や集団によって異なる可能性があり、また人々が合意すれば変えられるとされる規則である。また、**個人的規則**は、自分が自分に対して課した規則であり、「毎朝六時に体操をする」など、ほかの人に対する強制力を必ずしも持たないような規則である。

この分類に従うと、例えば、個人的規則の場合には、規則を守ることによる結果を知ること、自分は規則を守ることができるという自尊心が規範意識に大きく寄与するに違いない。一方、社会的な取り決

めとしての社会慣習的規則については、みんなが守ることによる安定感、自分がその集団の中で大切な一員であるという感覚が、規範意識につながることは容易に想像できる。

本稿では、子どもたちがさまざまな経験を通して規範意識を育てていく時に何が獲得されているのかを理解するために、二つの点を述べた。子どもたちの規範意識を育てるためには、まず子どもたちの多様な「規範経験」を理解することから始める必要があるのかもしれない。

参考文献

- 1 内藤俊史・奥野佐矢子『レスト・ナルヴァエスによる道徳教育プロジェクト—コールバーグ以降の道徳教育案の二つの方向』道徳と教育 二〇〇二年 No.312-313 pp.124-130

- 2 首藤敏元・チュリエル 日本道徳性心理学研究会編『道徳性心理学—道徳教育のための心理学—』北大路書房 一九九二年 pp.133-144